

## ノスタルジーを（もっと）複雑化するために

——バルバラ・カッサン『ノスタルジー』をめぐって——

関大聡

### はじめに 「複雑化する」とはどういうことか

本稿の主な目的は、フランスの哲学者・文献学者バルバラ・カッサンの著書『ノスタルジー』（2013）を紹介することにある<sup>1</sup>。「郷愁」、「望郷」などと訳される *Nostalgia* は、後述する語の発明以来、人々をたえず魅了し、その観念・歴史を扱った文献も数多い。カッサンもまた、150 ページ余りの小著でノスタルジーを扱うにあたり、それら先行文献に敬意を払っている。ここでは、彼女が言及する三つの研究——アンドレ・ボルズィンガーの『ノスタルジーの歴史』（2007）、ジャン・スタロバンスキーの「ノスタルジーの概念」（1966）、ウラジミール・ジャンケレヴィッチの『還らぬ時と郷愁』（1974）——との対比で、カッサンのノスタルジー論の位置づけを試みたい。

このような本稿の試みは複雑だという印象を与えるかもしれない。ノスタルジーという事象それ自体を取り上げるのではなく、それが複数のテキストの上で語られる仕方の差異に関心を寄せるといふのだから。だが、カッサンが企てたのはまさに「ノスタルジーの複雑化」だというのが、本稿で主張される論点である。そしてその「複雑化」にあたり、文献学者としての彼女は、現象学者や医者のように事象それ自体に向かうのではなく、あくまでテキスト、すなわち書かれた言葉に向かう。そうであれば、その企てを追いかける本稿の試みの複雑さも、ある程度正当化されるものと信ずる。

では、「ノスタルジーの複雑化」とはどういうことか。それを理解するには、まずカッサンにおける「複雑化」の戦略について一瞥しておく必要がある。また、その機会を利用し、彼女が追求する主題のいくつかを紹介しておくのは、日本ではまだあまり知られていないカッサンを論ずる上で有益だと思われる<sup>2</sup>。たとえば、「普遍的なものを複雑化する」（*Complicquer l'universel*）という副題をもつ『翻訳礼讃』を紐解いてみよう<sup>3</sup>。同書で彼女は、ヘレニスト（ギリシア語学者）

<sup>1</sup> Barbara Cassin, *La nostalgie. Quand donc est-on chez soi ?* (2013), Paris, Pluriel, 2015. 邦訳はバルバラ・カッサン『ノスタルジー 我が家にいるとはどういうことか？ オデュッセウス、アエネアス、アーレント』馬場智一訳、花伝社、2020年。本稿は馬場氏による翻訳を機に執筆されたものである。引用にあたっては原著ページ数と邦訳ページ数を併記するが、訳文は適宜変更している。

<sup>2</sup> カッサンの著作・思想については訳者である馬場氏の解説を、またとくに「女性と哲学」に関する彼女の考えについては、小文であるが以下の拙稿も参照されたい。「アカデミー、女性、哲学——通りすがりのひと、バーバラ・カッサンに」『図書新聞』3476号、2020年12月19日、8頁。

<sup>3</sup> Barbara Cassin, *Éloge de la traduction. Complicquer l'universel*, Paris, Fayard, 2016. 同書については以下の

としてギリシア人およびギリシア語を礼讃しつつも、同時にそこに「普遍的なものの病理」を見出す。たとえばギリシア人は、普遍的なロゴス（思考＝言語）の独占権を主張しながら、それに順応しないものを野蛮人（バルバロイ）として排除してきた。この種の〈普遍的なもの〉、〈一なるもの〉による包摂と排除の論理（病理）への警戒は、彼女の著作の随所に見られる<sup>4</sup>。彼女が「普遍的なものを複雑化する」というのは、何よりこの病理から逃れるための戦略なのである。

普遍的なものを複雑化するの、その病理、つまり排除に加担しないための一番のやり方なのだ<sup>5</sup>。

このように、普遍的なものが他者の排除に帰結または反転してしまうという事態を前に、彼女は普遍を「複雑化」させると言う。では、この「複雑化」とはどういう身振りか。これを〈普遍的なもの〉の単なる拒絶・否定と同一視しては、彼女の立場を見誤ることになる。むしろ、〈普遍的なもの〉の閉域に飛び込み、それがその根底、起源においてすでに多義的なもの、曖昧なものであることを指摘し、外へとこじ開け、別のパースペクティヴ、相対的な見方に開いてゆく——「複雑化」とはそのような戦略だと言っておこう。『ノスタルジー』から関連する一節を引用しておく。

優れた戦略は以下のようなものだ。つまり、全体主義につながりかねない「画一化」に抗って、哲学的な普遍と真理を根底から複雑化させることを選ぶことだ<sup>6</sup>。

彼女が「翻訳」を重視する理由はここにある。伝統的な哲学の世界で軽視されてきた翻訳は、「普遍的なものを複雑化する」ための特権的方法なのだ。ギリシア語こそ（あるいはドイツ語こそ、フランス語こそ）思惟の普遍性を体現する言語である、という言語的ナショナリズムの傲慢に対して、翻訳という営為は、「言語の現実性は多様なものとしてのみ現れる」（フンボルト）という端的な事実を突きつけ、読む者を「世界の揺れ動く曖昧さ」（アーレント）へといざなう<sup>7</sup>。

---

紹介も参照されたい。黒木秀房「翻訳礼賛に潜む戦略的パースペクティヴ：抵抗としての「人間性」

Prétexte : Jean-Jacques Rousseau URL : [http://pretexte-jean-jacques-rousseau.org/?page=pg03d\\_170618000649](http://pretexte-jean-jacques-rousseau.org/?page=pg03d_170618000649)

<sup>4</sup>別の例を挙げるなら、まさにギリシア的ロゴスの精髓として、パルメニデス—プラトン—アリストテレスに確立される存在論の伝統が、プロタゴラスやゴルギアスに代表されるソフィストを（人間らしい意味のある発話をしないという理由で）植物になぞらえて批判するとき、そこで働くのも存在論による包摂と排除の論理である。「アリストテレスの言う植物は今日なら死体置き場か癲狂院行きだ」とカッサンが言うとき、そこに理性による非理性の排除、すなわちフォーコー的な「狂気の歴史」の響きを聞き取ることもできる。Barbara Cassin, *L'effet sophistique*, Paris, Gallimard, 1995, p. 17.

<sup>5</sup> « Compliquer l'universel est une première manière de ne pas souscrire à sa pathologie, à savoir l'exclusion. » Barbara Cassin, *Éloge de la traduction*, op. cit., p. 153.

<sup>6</sup> « Bonne politique : contre une *uniformisation* qui risque le totalitarisme, choisir de compliquer radicalement l'universel et la vérité philosophiques. » Barbara Cassin, *La nostalgie*, op. cit., p. 124. (邦訳 119 頁)

<sup>7</sup> 講演会に基づく著書『ひとつ以上の言語で』では、このことを世界の「複雑化」と呼ぶ。« Parce

こうした翻訳による複雑化のプログラムを、カッサンはジャック・デリダの言葉を借りて「ひとつ以上の言語を」とも表現する。この定式を、デリダが「脱構築の唯一の定義<sup>8</sup>」とさえ呼んだことを思い起こすなら、カッサンの言う複雑化戦略は、まさしく脱構築の伝統に与するものと考えられよう。

いささか長くなったが、以上のようにカッサンの思想的戦略を概観するとき（これを「ソフィスト的戦略」と呼んでもよい）、「ノスタルジーの複雑化」はそうした実践の好個の例と言える。ノスタルジーが、旅先で離れた故郷、あるいは時を経て失われた拠り所に抱く感情だとすれば、それは誰の胸中にも普遍的に去来しうる。だが、故郷への愛着が、離れがたい〈唯一の〉故郷の理想化につながる時、その感情は病的になりかねない<sup>9</sup>。実際、後述するように元々ノスタルジーは病気として認識されてきた。医師たちはその処方箋として、「故郷に帰ること」ないし「故郷に帰るといふ希望をもつこと」が重要だとの認識を示してきたが、本書でのカッサンの見立ては異なる。まさにノスタルジーを「複雑に」すること、帰還や帰郷ではなく、いくつもの道をさまようことが、処方箋として提示されるのである。

その複雑化の道は彼女が扱うケースによって異なる。故郷に帰るや否や新たな旅路に向け再出発すること（オデュッセウス）、古い故郷を棄て新たな故郷を作り上げること（アエネアス）、故郷を言葉のうちに留めること（アーレント）——要約的に言えばこのようになるが、いずれもそれぞれの仕方で故郷との関係を複雑にしている<sup>10</sup>。そしてその複雑性の認識は、故郷という〈かけがえのないもの〉への反省、距離化を促し、読者はその病理性との適切な付き合い方を学ぶ。本書にはそのような治療的側面があるということの本稿では強調したい<sup>11</sup>。以上見てきた意味で『ノスタルジー』は、彼女の仕事の周縁に位置づけられる余技的な著作ではなく、そのエッセンスが詰まった貴重な一冊である。

本稿では、このノスタルジーの複雑化を、本書と先行研究の比較を通して「もっと」複雑にす

qu'il en existe plus d'une, le monde est plus intéressant, plus varié, plus compliqué. Cette complication nous interdit de croire que nous sommes seuls à posséder la vérité. » Barbara Cassin, *Plus d'une langue*, Paris, Bayard, 2012, p. 35.

<sup>8</sup> Jacques Derrida, *Mémoires pour Paul de Man*, Paris, Galilée, 1988, p. 38. アカデミー・フランセーズの会員に選ばれたとき、カッサンはこの「ひとつ以上の言語を」という銘句を佩剣に刻んだ。Cf. Barbara Cassin, *Discours de réception de Barbara Cassin à l'Académie française*, Paris, Fayard, 2020.

<sup>9</sup> 故郷との関係が引き起こす病理の最悪の発露は、ファシズムやナチズムが伝播させた「大地と血の崇拜」（p. 22、邦訳 18 頁）であろう。こうした故郷との危険な関係を「病理」と直接名指すことを本書の彼女はしていないが、他の著作には散見される語彙であり、本稿もそれを（それに対する「治療」という語彙とともに）採用する。

<sup>10</sup> 第二章では次のように述べられている。「アエネアスの落ち延びの結果として生まれた、ローマの二重の出自、少なくとも二つの言語〔ギリシア語とラテン語〕は、言語と民族の関係を別の仕方で構築し、ノスタルジーをさらに複雑にさせる。」（Barbara Cassin, *La nostalgie*, op. cit., p. 84、邦訳 81 頁、傍点引用者）

<sup>11</sup> こうした治療的側面はカッサンの著作全体に通底しており、ラカンの精神分析からの影響は大きい。彼女は言説（ロゴス）が毒とも薬ともなりうる事態を、「ロゴス—ファルマコン」という表現で定式化している。Cf. Barbara Cassin, *Jacques le Sophiste. Lacan, logos et psychanalyse*, Paris, Epel, 2012.

ることに貢献したい。学者が行論にあたり先行研究に言及する仕方は、本文で部分的に引用されるか、注に追いやられるかを問わず、周縁的なものとなるのが常である（エッセイであればなおさら）。だが実際に両者を対照してみると、そこには見逃せない差異や異同が見出される。ここでは、すでに名を挙げた三人の書き手（アンドレ・ボルズィンガー、ジャン・スタロバンスキー、ウラジミール・ジャンケレヴィッチ）と対照させつつ、とりわけ三つの論点に注目しよう。すなわち、（１）「ノスタルジー」という語の発明をめぐる歴史、（２）ノスタルジーの医学的側面と思想・文化的側面の交差、（３）「閉じたノスタルジー」と「開かれたノスタルジー」の区別、である。これにより、ノスタルジー論の奥行き、重層性と、その積み重ねの上に成り立つものとしてのカッサンの『ノスタルジー』の独自性の、双方を提示することが本稿の野心である。

### 1. 「ノスタルジー」——言葉の歴史をめぐる

まず、「ノスタルジー」という語の発明をめぐるエピソードから出発しよう。カッサンは序文にこう記している。

「ノスタルジー」、言葉の響きは完全にギリシア語だ。「帰還」を意味する *nostos* に、「痛み」、「苦しみ」を意味する *algos* が接合されている。ノスタルジー、それは「帰還の痛み」である。遠く離れている時に襲う苦しみであり、同時に、帰るために耐えねばならない労苦を意味する。[...] しかし、「ノスタルジー」はギリシア語ではない。この語を『オデュッセイア』に見つけることはできない。これはギリシア語ではなく、スイス語、スイスのドイツ語である。実を言えばこれは、十七世紀になってはじめて病気のリストに加えられた病名である<sup>12</sup>。

これは本書で、おそらく最初に読者を驚かせる説明だろう。帰還の痛み、「ノスタルジー」は、それがどれほど普遍的で、古代から連綿と続く感情に思われても、実は近代的な発明、「つくりだされた伝統」の典型的な例だというのである。この歴史的事実を参照するため、カッサンはアンドレ・ボルズィンガーによる 2007 年の著書『ノスタルジーの歴史』に依拠している<sup>13</sup>。同書は、ノスタルジーを文化現象としてではなく医学の問題として再検討するため、十七世紀から二十世紀に至るまでフランスで刊行された六十本余りの博士論文を調査している。その目論みは、ノスタ

<sup>12</sup> « “Nostalgie”, le mot sonne parfaitement grec, sur *nostos*, le “retour”, et *algos*, la “douleur”, la “souffrance”. La nostalgie, c’est la “douleur du retour”, à la fois la souffrance qui vous tient quand on est loin et les peines que l’on endure pour rentrer. [...] Pourtant, “nostalgie” n’est pas un mot grec, on ne le trouve pas dans l’*Odysée*. Ce n’est pas un mot grec mais un mot suisse, suisse allemand. C’est à vrai dire le nom d’une maladie répertoriée comme telle seulement au XVII<sup>e</sup> siècle. » Barbara Cassin, *La nostalgie*, op. cit., p. 16-17. (邦訳 13-14 頁)

<sup>13</sup> André Bolzinger, *Histoire de la nostalgie*, Paris, Campagne première, 2007. 著者は精神科医であり、精神医学の歴史家でもある。主な著作は以下。 *La réception de Freud en France : avant 1900*, Paris, L’Harmattan, 1999 ; *Freud et les Parisiens*, Paris, Campagne première, 2002 ; *Portrait de Sigmund Freud : trésors d’une correspondance*, Paris, Campagne première, 2012.

ルギーを、医学史の謎に満ちた一ページとして位置付けることにある<sup>14</sup>。第一部ではノスタルジーという語の「発明」をめぐる歴史と、それが「スイス人の病」と考えられたことについて、民族の気質、風土、文化的・歴史的条件などが取り沙汰されたことが明らかにされる。第二部では、ノスタルジーを発症するさまざまな社会的身分や境遇の事例（自由を奪われた囚人、匿名状態の入院患者、軍隊に入れられた若者、家族を離れて大学に通う学生、夫の仕事の転勤についていく妻、仕事のため海を渡る移民など）が分析される。そして第三部では、解剖中心の精神医学に対して言葉の使用を中心に据えたフロイトの功績が、そのノスタルジーの診療に関して検討される。

ところで、ノスタルジーという語の「発明」をめぐる記述は、同書第一部の第一章、第二章に見えるのだが、カッサンの記述はこれに必ずしも忠実ではない。

『フランス語歴史辞典』を信じるなら、この言葉は、正確に言えば一六七八年、医師ジャン＝ジャック・ハーダーが、郷愁、〔ドイツ語で〕*Heimweh* を指すために考案したものである。〔…〕あるいは、一六八八年、ミュールーズのアルザス人牧師の息子ヨハンスないしジャン・ホーファーの造った語とされる<sup>15</sup>。

このように彼女は、まずアラン・レイ編纂による『フランス語歴史辞典』を挙げ、ノスタルジーという語の発明に関して二つの説を併記している（1678年のジャン＝ジャック・ハーダー説と、1688年のジャン・ホーファー説）。この箇所を読んだ読者は、ノスタルジーという語の初出ははっきり分かっていないのだと思うはずである。しかし、実はボルズィンガーは前者の説（1678年のハーダー説）を明確に否定しており、この俗説がなぜ生まれたかの経緯まで説明している。他方、彼女が参照元としている『フランス語歴史辞典』について言うなら、彼女は同辞典のどの版を参照したかまで明記していない。そこで同辞典を参照してみると、なるほどこの辞書の第三版（1998年）までは「ノスタルジー」がハーダーの造語とされているが<sup>16</sup>、カッサンも参照しえた第四版（2010年）を見ると、ホーファーの造語と訂正されている（但し年代は1678年のまま）<sup>17</sup>。したがって、『フランス語歴史辞典』を信じたところで、ホーファーが「ノスタルジー」

<sup>14</sup> « La nostalgie aura marqué une page de l'histoire de la médecine, riche en énigmes qui sollicitent aujourd'hui notre réflexion. » *Ibid.*, p. 15.

<sup>15</sup> « Il [le mot de nostalgie] a été inventé, à en croire le *Dictionnaire historique de la langue française*, en 1678 exactement par un médecin, Jean-Jacques Harder, pour dire le mal du pays, *Heimweh* [...]. À moins qu'il n'ait été forgé en 1688 par Johans ou Jean Hofer, le fils d'un pasteur alsacien de Mulhouse [...]. » Barbara Cassin, *La nostalgie*, *op. cit.*, p. 17. (邦訳 14 頁)

<sup>16</sup> « NOSTALGIE [n.f.] est [...] créé en 1678 par le médecin suisse Jean-Jacques Harder [...]. » *Dictionnaire historique de la langue française*, 3<sup>e</sup> éd., sous la direction d'Alain Rey, Paris, Le Robert, 1998, p. 2304.

<sup>17</sup> « NOSTALGIE [n.f.] est [...] créé en 1678 par le Suisse M. Hofer dans le titre de sa thèse de médecine [...]. » *Dictionnaire historique de la langue française*, 4<sup>e</sup> éd., sous la direction d'Alain Rey, Paris, Le Robert, 2010, p. 1431.

という語の発明者だという事実は揺るがない。カッサンにしてはやや不注意だったと言えるが<sup>18</sup>、とはいえ彼女は注でハーダー説が生まれた経緯についてボルズィンガーに依拠して記述しているのだ。

『ノスタルジーの歴史』第一部一章、二章では、いかにして、ホーファーの学位論文（一六八八年、全十六頁）がツヴィンガー（一七一〇年）によって編集出版され、「補完」されたのか、次いで、ハラール（一七四五年）によって再版されたのかが示されている。ハラールは、最初のテキストに戻っているが、出版年に誤りがあり（一六八八年ではなく一六七八年になっている）、そこからハーダーこそ先行者だという仮説が生まれたのだ<sup>19</sup>。

だが、これは短い記述に留まり、何より両論併記に留めている本文との整合性が不明瞭になる。この不明瞭さを取り払うため、『ノスタルジーの歴史』の最初の章をあらためて参照し、著者が「ノスタルジー」という語の発明について何を論じているか確認しておこう。

『ノスタルジーの歴史』の著者ボルズィンガーによれば、この語の発明者はジャン（ヨハンス）・ホーファーということで疑いない。ホーファー家は地元ミュールーズでは名士として知られる医者の家系で、ジャンもまたバーゼル大学で医学を修めることになった。当時、この大学の解剖学講座の教授はジャン＝ジャック・ハーダーが務めていた（後にノスタルジーの生みの親と誤って信じられる人物である）。ホーファーは19歳のとき、つまり1688年に、問題の『ノスタルジー、あるいは郷愁についての医学論文 *Dissertatio medica de nostalgia, oder Heimwehe*』（以下『ノスタルジー論』）を提出するのだが、これは学位論文の準備論文として用意されたものであった（本論文は子宮疾患について）。

結果として彼の名を後世に残したのは、16ページ足らずの準備論文の方だったわけだが、後世は数奇な扱いでそれを遇することになる。まず1710年、ホーファーの師にあたるテオドル・ツヴィンガー *Theodor Zwinger* という医学者が、学位論文のアンソロジーを編んだ。そのなかにホーファーの『ノスタルジー論』も収録されたのだが、そこには今日からすると信じがたい改変が加えられてしまう。たとえば、ホーファーの元論文には、学生と農婦、二件の症例観察が含まれていたのだが、ツヴィンガーはそこに自身が行なった観察例を一件付け加えている。また、ツヴィンガーはチューリヒにいる同僚の研究への言及も付け足しているのだが、これはホーファーの論文よりはるかに後年、1705年に発表されたものである。さらに、ホーファーは基本的に市民（学生と農婦）の症例研究をしていたのに対して、ツヴィンガーは軍隊における軍人たちを

<sup>18</sup> とはいえ、これはほぼすべての辞書に共通する事態である。*Petit Robert* では語の初出が1678年とされているし、*Trésor de la langue française* でも「1678, J. J. Harder」と記されている。

<sup>19</sup> « Voir l'*Histoire de la nostalgie* d'André Bolzinger [...] ici I, 1 et 2, qui montre comment la thèse de Hofer (16 pages en 1688) a été éditée et "complétée" par Zwinger (1710), puis rééditée par Haller (1745) qui fait retour au texte primitif mais avec une erreur de datation (1678 au lieu de 1688), d'où l'hypothèse d'un précurseur nommé Harder. » Barbara Cassin, *La nostalgie, op. cit.*, p. 133, note 4. (邦訳20頁、注4)

襲う郷愁を問題にしている（軍人が駐屯先で望郷に囚われ戦意喪失に陥る事態は、当時の軍規維持における大問題だった）。こうして、元々16 ページだった論文が量的にも質的にも膨らみ、25 ページの論文になった。そして、極めつけに重要な修正として、タイトルの変更があった。題名から *Nostalgia* の語は消え去り、代わりに *pothopatridalgia* という語があてられたのである<sup>20</sup>。以上が、先に挙げた引用のなかで、カッサンがツヴィンガーによる「補完」と呼んだものの実態である。

ついで 1745 年、今度はアルベール・ハラール Albert Haller という医師が、これも学位論文のアンソロジーを組むことになり、こちらにも『ノスタルジー論』が収録される。しかし、彼は元の 1688 年の版を参照し直すことでツヴィンガーによる「補完」を採用せず、タイトルにも *Nostalgia* の語が戻された。但し、この原点回帰にも、二点の重要な変更が存在する。ひとつは、タイトルについて。ホーファーの論文題目は後半部分にドイツ語で「あるいは郷愁」と記されていたが、ハラールはそれを「一般に郷愁、あるいは懐郷症 *Heimsehnsucht*」とし、ノスタルジーに別の翻訳を付け加えたのである。もうひとつは、そしてこれが致命的なのだが、元論文の刊行年月を 1688 年 6 月 22 日ではなく、1678 年 6 月 22 日に誤記してしまったことである。こうなると、1669 年生まれのホーファーは九歳のときに学位論文を書いた神童ということになってしまう。以上のような事情、そして、指導教授として表紙に（著者より大きく）名が掲載されていたためでもあろうが、ジャン＝ジャック・ハーダーこそが 1678 年に『ノスタルジー論』を書いたのだという俗説が流布し、ホーファーはその後長きに渡り歴史から忘却されることになった。『ノスタルジーの歴史』の著者はそのように推論している。

以上の議論を説得的なものとして受け取るかぎり、1688 年の『ノスタルジー論』の著者にジャン・ホーファーを認めるのは決定的である。実際、この後で見るスタロバンスキーにしても、ホーファーをノスタルジーの造語者として早くから認めている。では、なぜカッサンはハーダー説を両論併記的な仕方に残したのか。そこに単なる不用意以上の意を汲むのであれば、「ノスタルジー」という言葉の歴史が、「起源とは何か」をめぐるカッサンのより射程の広い考察に対して、一種のインスピレーションを与えたということが考えられるかもしれない。まず、「ノスタルジー」という語は、そのギリシア語的響きにもかかわらず、スイスで 17 世紀に生まれた造語であるという事実。また、「ノスタルジー」という語以外にも、「郷愁」、「愛郷症」、「懐郷痛」、「懐郷症」といった別の表現も提案されてきたという事実。そして、『ノスタルジー論』にはホーファーとハーダーという「二人」の著者が目されてきたという（虚偽の）事実。これらはいずれも、「ノスタルジー」の謎めいた歴史、今日も大半の辞書によって誤認されている、語の「故郷」としての語源をめぐる多義性、曖昧さを表しているように思われる。こうした多義性、曖昧さに飛び込むことは、まさにカッサンにとって「ノスタルジーの複雑化」という戦略の一端をなすものである。ノスタルジーの複雑化という戦略のなかで、オデュッセウス、アエネアス、アー

<sup>20</sup> 正式な題は « *Dissertatio medica tertia de pothopatridalgia* » となる。『ノスタルジー』翻訳者の馬場氏は「懐郷痛」との訳語をあてている。

レントが扱われるだけでなく、言葉の歴史もまた活用されたのではないか。本節ではそのような可能性を示唆するに留めて、次の点に進みたいと思う<sup>21</sup>。

## 2. ノスタルジーの医学的側面と思想・文化的側面の交差

前節で扱ったボルズィンガーは、今日、ノスタルジーが文化的テーマとしては流行していても、当時重視されていた医学的問題としての側面が見失われているとして、研究の必要性を訴えていた。本節では、この医学的側面と思想・文化的側面を切り離すことなく、双方の交差に注目した論として、ジャン・スタロバンスキーによる「ノスタルジーの概念」を扱うことにしよう<sup>22</sup>。この1966年の論文は、2012年の論文集『メランコリーのインク』に再録されるまで単行本化されてこなかった。ところがこれは、約20ページ強の紙幅とはいえ、単なる学説紹介には留まらない射程の広さを備えた論文である。

論文の構成から述べよう。まずスタロバンスキーは感情または心性 (*mentalité*) の歴史を活字で残った資料から検討することの一般的困難に言及する。次に「ノスタルジー」という語がホーファーによって「発明」された経緯を紹介し、愛に関する憂愁 (メランコリー) ならまだしも、場所に関する憂愁を指摘した点でノスタルジーは画期的だったとする。ノスタルジーが、とくにスイス人の軍人、傭兵が外国で逃亡・自殺してしまう軍事的・医学的問題としてクローズアップされたことは先にも触れたが、その原因として、スイス人の民族性に関する心因的解釈や、スイスの気候や高山地方の標高に関する生理学的解釈など、さまざまな解釈が提出されてきた。それらの学説史の紹介に加えて、とりわけスタロバンスキーの筆致が冴えるのは、百科全書派、ルソーを経て、ノスタルジーがロマン主義的感性を形成する経緯の記述においてである。ノスタルジーは、早くから想像力や記憶の病理としての側面を指摘されてきたわけで、病の医学的・文化的結節に関心を抱くスタロバンスキーにとって格好の主題を提供する。先述のテオドール・ツヴィンガーの紹介により有名になった「牛追い歌」(スイスの伝統的民謡で、従軍中のスイス兵がこれを聴き郷愁に駆られることが相次ぎ問題になった) についてルソーが『音楽辞典』で述べていることを参照しながら、スタロバンスキーは次のように書く。

亡命、アルプスの音楽、苦しくも優しい思い出、幼少期の輝くイメージ、これら主題が重なり合うことで、ノスタルジーの「聴覚的」理論に繋がり、それはさらに音楽のロマン主

<sup>21</sup> 但し、このような論点は事実レベルの一義性と解釈レベルの多義性を混同するものではないか、という反論があるかもしれない。実際、カッサンの相対主義的な立場からすれば、ポスト真実やフェイクニュースの問題にどう応答できるか、という問題がおのずと生じてくるはずである。これは本稿の限られた趣旨を越える問いであるが、彼女が以下の書の結論部でその問題を扱っていることは紹介しておきたい。Barbara Cassin, *Quand dire, c'est vraiment faire. Homère, Gorgias et le peuple arc-en ciel*, Paris, Fayard, 2018.

<sup>22</sup> Jean Starobinski, « Le concept de nostalgie », *Diogène*, n° 54, 1966, p. 92-115, repris sous le titre de « L'invention d'une maladie » dans *L'encre de la mélancolie*, Paris, Seuil, « Essais », 2015. (ジャン・スタロバンスキー「ノスタルジーの概念」松本勤訳『ディオゲネス』第二号、河出書房、1967年)



義的理論の形成や、ロマン主義そのものの形成に貢献した<sup>23</sup>。

こうしてスタロバンスキーが強調するのは、ノスタルジーが十九世紀にわたり思想・文化的現象、さらに流行現象となるに従い、一種の紋切型になる経緯である。その反面、郷愁は医学的な知見としては顧みられなくなり、十九世紀後半、とりわけ二十世紀になると、博士論文の数も目立って減少し、別の用語（適応障害など）に取り換えられてゆく。こうした盛衰を含めてノスタルジーが、十七世紀後半から十八世紀後半にかけて医学的側面と思想・文化的側面の両面から発展してきたのは事実であり、スタロバンスキーは両者の交差を見事に探り当てている。

そもそも、『メランコリーのインク』という論集の巻頭を飾るのは、スタロバンスキーが 1960 年、医学博士論文として提出した『メランコリーの治療の歴史』であった。書誌情報によるとこれはローザンヌ大学に提出され、バーゼル——つまり「ノスタルジー」という語が発明された地——で印刷された。スイス人スタロバンスキーにとって、メランコリーの一種として、またスイスの風土病のようなものとして理解されたノスタルジーの概念に関心を抱くのは、ごく自然な流れだったと言えよう。

翻ってカッサンの『ノスタルジー』を考えてみると、そこに医学的な側面への注目が顕著だとは言えない。もっぱら思想・文化的な側面、さらに言うと政治的な側面からノスタルジーは論じられている。このことは、スタロバンスキーが結語で示す精神分析的展望と比較してみると明瞭である。1966 年の彼はこう結んでいた。

社会に適応せよという命令が加速化する今日にあって、ノスタルジーはもはや失われた故郷を指すものではない。それは、欲望が外的障害を考慮せずとも済んだ時期、欲望がその実現を滞らせずともよかった時期への回帰である。もはや根をもたない文明人にとって、問題となるのは、成人の世界に参入せよという要請と、幼少期の特権を保存したいという誘惑の間での葛藤である。故国喪失の文学は、今日いまだかつてなく豊富であるが、その大半は失われた子供時代の文学なのである<sup>24</sup>。

ここでスタロバンスキーが述べているのは、1966 年の当時において、ノスタルジーが空間的に隔たった場所を指すものではなく、内面、記憶のなかの故郷としての幼少期や家族環境を指すも

<sup>23</sup> « Exil, musiques alpestres, mémoire douloureuse et tendre, images dorées de l'enfance : cette rencontre de thèmes conduit à une théorie "acoustique" de la nostalgie qui contribuera à la formation de la théorie romantique de la musique et à la définition même du romantisme. » *Ibid.*, p. 279.

<sup>24</sup> « Aujourd'hui, alors que s'accroît l'impératif de l'adaptation sociale, la nostalgie ne désigne plus une patrie perdue, mais remonte vers le stade où le désir n'avait pas à tenir compte de l'obstacle externe et n'était pas condamné à différer sa réalisation. Pour l'homme civilisé qui n'a plus d'enracinement, ce qui fait problème, c'est le conflit entre l'exigence de l'intégration au monde adulte et la tentation de conserver les privilèges de la situation enfantine. La littérature de l'exil, plus abondante que jamais, est, dans sa grande majorité, une littérature de l'enfance perdue. » *Ibid.*, p. 290.

のになったという理解である。「もはや根をもたない文明人」には、故郷喪失のリアリティは薄れ、「何かを失ってしまった」という感覚があるとすれば、輝かしい幼少期を措いてほかない。

「障碍 *obstacle*」という語が用いられている点からも、1957年のルソー論『透明と障碍』の議論の延長をここに読み取ることはまったく正当なことであるが、スタロバンスキーにとってノスタルジーは空間的な隔たりの次元、ひいては、地政学的な次元を喪失してしまっている。

しかし、それから半世紀以上経ち、精神分析の全盛から距離を置いて接することができる今日の視点からすれば、彼が時代遅れと見なした「根」の主題、あるいは故郷喪失の主題こそ、再びアクチュアリティを獲得していると言えるのではないか。カッサンもまた、アーレントに関する章で、「亡命者、難民、ユダヤ人」が体現する、根から切り離されたあり方を、ひとつの「人間の条件」として捉えようと試みていた<sup>25</sup>。とはいえ彼女は、「根なし草」的な実存をシンプルに賞讃したわけではない。

亡命がわれわれ現代人の条件のモデルである、そしてわれらはみな亡命者だ。このように口で言うことは、自分自身が実際に亡命者ではない時、あるいは本当にはそうでない時にはずっと容易い。ボルズィンガーは言う、ノスタルジーとは「遺産に対する文化的痛み」である。唯一の遺産が言語である時、そしてそれを職業にする時、根こぎではなく気根（空中に生える根）を、空へ向かって持ち、讃えることができる [...] <sup>26</sup>。

気根、すなわち空中に生える根 (*racines aériennes*)。ギュスター・アンダースに由来する、この詩的夢想を誘う表現の含意を解明しようと試みるよりも、それがとりわけ「大地に生える根」の思想——モーリス・バレス以来、ナショナリズムの根本イメージのひとつとなった——に対する批判的代替案であることを強調することが重要だろう。故郷への強い愛着は、ナショナリズムや排外主義を招きかねず、それに対して根なし草的な実存を称揚することも、反動的な根への回帰を招きかねない。カッサンのノスタルジーへの関心のひとつの到達点（だが、それもまたひとつの出発点に違いない）は、こうした「根」をめぐる争いにひとつの答えを与えることにある。あるいは、「答え」というより「処方箋」と言う方が適切かもしれない。冒頭にも述べた通り、彼女のノスタルジー論には、〈普遍的なもの〉や〈一なるもの〉の病理、ここでは〈根〉の病理に対して、その熱狂を冷ますための治療的側面がある。そして、この意味で、カッサンの『ノスタルジー』には「医学的な側面への注目が顕著だとは言えない」と先ほど述べたことには、修正が必要になるだろう。まさしく彼女は、医者としてではないにせよ、文献学者・哲学者として、言葉 (*logos*) を用いた郷愁との病的でない関係を模索していたのだから。

<sup>25</sup> Cf. Barbara Cassin, *La nostalgie, op. cit.*, p. 123. (邦訳 118 頁)

<sup>26</sup> « Dire que l'exil est le modèle de notre condition d'homme contemporain, et que nous sommes tous des exilés, c'est évidemment beaucoup plus facile quand on ne l'est pas, ou pas vraiment. La nostalgie, dit Bolzinger, est "un mal culturel au patrimoine". Quand le seul patrimoine est la langue, et qu'on en fait métier, on peut tenir en l'air et faire l'éloge non pas du déracinement [...], mais des racines aériennes. » *Ibid.*, p. 130. (邦訳 124 頁)

### 3. 「閉じたノスタルジー」と「開かれたノスタルジー」の区別

最後に第三の論点、「閉じたノスタルジー」と「開かれたノスタルジー」の区別について、ウラジミール・ジャンケレヴィッチを参照しながら考えたい。『ノスタルジー』第一章、オデュッセウスをめぐる議論の後半で、カッサンは「二重のノスタルジー」について言及している。ドイツ語では *Heimweh* と *Sehnsucht* という二語で表現される、このノスタルジーの二重性は、それぞれ「閉じたノスタルジー」と「開かれたノスタルジー」として区別される。簡単に述べるなら、閉じたノスタルジーは帰還の欲望であり、単純に理解される意味でのノスタルジー、西洋史の長きにわたってオデュッセウスが体現してきた「定住的忠実さ<sup>27</sup>」である。これに対して開かれたノスタルジーとは、つねに何かに憧れ、家に帰還してもそこに留まることができず、再び出発してしまうような、そうした「見つけることのできない対象」への永遠の帰還の途ということになる。カッサンはこれを「帰還」と「さまよい」の二重性とも言い、ノスタルジーの二側面と考える。そうした文脈で、オデュッセウスが、イタケーの妻ペネロペイアのもとに還り、なおまた再出発するという、「さまよい」の側面を強調したのだった。

この箇所の注で、カッサンはこれがジャンケレヴィッチと前述のボルズィンガー、それにリュディ・アンバックの『ダンテ、哲学と世俗人たち』を混ぜ合わせた議論であることを告白している。このなかで実質的に重要なのは、ジャンケレヴィッチの著書『還らぬ時と郷愁』である<sup>28</sup>。同書でもやはり、「閉じたノスタルジー」と「開かれたノスタルジー」の区別が議論の根幹に置かれている。閉じたノスタルジーとは、やはり単純な帰還の欲望であり、故郷に辿り着けばそこで癒される類のもの病みである。しかし、ノスタルジーとは本質的に閉じたものであり得るだろうか、とジャンケレヴィッチは論を進める。スタロバンスキーが引用した例であるが、カントは『人間学』のなかで望郷の念に言及し、ノスタルジーが欲望するのは、青年時代のどこか特定の場所ではなく、青年時代そのものなのだと言い、地理的な意味での帰還は失望をもたらすだけだと述べていた<sup>29</sup>。ジャンケレヴィッチの議論もこれを敷衍するものであり、郷愁の対象とは、過去に自分がいた、具体的、空間的に特定可能な場所ではなく、過去の過去性 (*passéité*) そのものなのだと指摘する。

手短かに言うところなる。郷愁病みがあればやこれやの存在であった必要はない。彼がただあったという事実一般、そして、そのようにしてあったからにはもちろん、生きものすべて

<sup>27</sup> *Ibid.*, p. 60. (邦訳 53 頁)

<sup>28</sup> Vladimir Jankélévitch, *L'irréversible et la nostalgie* (1974), Paris, Flammarion, « Champs essais », 2011. (ウラジミール・ジャンケレヴィッチ『還らぬ時と郷愁』仲沢紀雄訳、国文社、1994年)

<sup>29</sup> « Les Suisses [...] sont saisis du mal du pays, surtout quand on les transpose dans d'autres contrées ; [...] revenus plus tard chez eux, ils sont très déçus dans leur attente, et se trouvent ainsi guéris ; sans doute pensent-ils que tout s'est transformé ; mais en fait, c'est qu'ils n'ont pu y ramener leur jeunesse [...]. » Emmanuel Kant, *Anthropologie du point de vue pragmatique*, traduit par Michel Foucault, Paris, J. Vrin, 2008, p. 132. カントは帰郷の失望がノスタルジーからの回復をもたらすと書いている。逆にジャンケレヴィッチは、同じ理由のために郷愁を癒しえないものとするだろう。

がそうであるように、時に生き、愛し、苦しんだ、という事実があれば充分なのである。ノスタルジーの対象はあれやこれやの過去というより、過去という事実そのもの、別の言い方をすれば過去性である。この過去性の過去に対する関係は、時間性の時間に対する関係と同じである。なぜなら過去の過去性という事実それだけとの関係によって、そして現在の意識との関わりにおいて、過ぎ去った物たちの言い尽くせない魅力が意味をもつことから。こうしてついに過去の何性が露わになる<sup>30</sup>。

この見方を採るなら、時を遡りでもしない限り郷愁が癒されることはあり得ない。「ノスタルジーは、[帰郷という] 治療薬を必要とする病というだけではない。それは、治療薬の不充分さが惹き起こす不安でもある<sup>31</sup>」。ここでジャンケレヴィッチは、医者と患者のやりとりを例にした興味深い譬喩を持ち出している。医者に自分の病状を説明するとき、患者は「この辺が痛いです」、「胃が痛いです」などと言い、痛みの元になる場所を素人判断ながら特定しようとし、医者はその言葉を頼りに本当の患部がどこか探り当てようとする。この共同作業のなかで、患者も医者も、痛むのが「どこか」であるという確信は共有している。ところがノスタルジーの痛むところは、「ここ *ici*」でも「そこ *là*」でもなく、ここやそことは「別の場所 *ailleurs*」ですらない。それはあらゆる別の場所とは別の場所、すなわち〈彼方 *Au-delà*〉なのだ。ジャンケレヴィッチは言う。こうした〈彼方〉、永遠の〈他なるもの〉への憧れに掴まれたとき、ノスタルジーはただ一度の帰還によっては完結せず、永遠の帰還先、〈形而上学的祖国〉に向けた、〈形而上学的帰還〉の、長い旅路が始まることになる。これをジャンケレヴィッチは「開かれたノスタルジー」と呼んだのである<sup>32</sup>。

こうしてみると、カッサンのオデュッセウスをめぐる議論、とりわけその「閉じたノスタルジー」と「開かれたノスタルジー」の区別が、ジャンケレヴィッチのそれに大きく依拠したものであることが見えてくるが、同時にいくつかの違いを見て取ることもできる。まずは論証の仕方に関してである。カッサンは『オデュッセイア』のなかで、とくにオデュッセウスのイタケーへの帰還と、その後の再出発に注目し、この神話的英雄そのひとのうちに、帰還の欲望とさまよいの

<sup>30</sup> « D'un mot : il n'est pas nécessaire que le nostalgique ait été ceci ou cela, il suffit qu'il ait été en général, et qu'ayant été il ait bien entendu, selon l'occasion, vécu, aimé et souffert, comme tout ce qui existe. L'objet de la nostalgie ce n'est pas tel ou tel passé, mais c'est bien plutôt le fait du passé, autrement dit la *passéité*, laquelle est avec le passé dans le même rapport que la *temporalité* avec le temps. Car c'est par rapport au seul fait de la *passéité* du passé, et en relation avec la conscience d'aujourd'hui, que le charme inexprimable des choses révolues a un sens. Ainsi se dénude finalement la *quoddité* du passé. » Jankélévitch, *L'irréversible et la nostalgie, op. cit.*, p. 357.

<sup>31</sup> « La nostalgie n'est donc pas seulement un mal qui a besoin d'un remède, elle est encore l'inquiétude causée par l'insuffisance de ce remède. » *Ibid.*, p. 360.

<sup>32</sup> Cf. *Ibid.*, p. 361. もっとも、カッサンも注で付記しているように (58 頁、注 23)、ボルズィンガーはこうして帰還だけでなく出発もノスタルジーの裏面と考える態度を「図書館の論理の抽象的産物」(A. Bolzinger, *L'histoire de la nostalgie, op. cit.*, p. 213) と批判している。

欲望の二重性があることを論じていた。ジャンケレヴィッチの場合、少しやり方が異なる。彼は現代ギリシアの詩人ニコス・カザンザキスの長編詩『オデュシーア』を引用するのであるが、この詩は、イタケーに帰還して以降のオデュッセウスを描くもので、そこにあるのは故郷に安住できない英雄の姿である。カザンザキスに描かれたこの現代版オデュッセウスこそ、ジャンケレヴィッチにとっては「開かれたノスタルジー」を体現する。

古代のオデュッセウスは、ひとたび帰還すればもはや何も望まない。だが現代のオデュッセウスは、ペネロペイアのもとに帰り、長年恋焦がれてきた家に帰るや否や、退屈し始める。なんと苦々しい笑いだろうか<sup>33</sup>！

このように、ジャンケレヴィッチは古代のオデュッセウスと現代のオデュッセウスを対比させ、それぞれに「閉じたノスタルジー」と「開かれたノスタルジー」を割り当てている<sup>34</sup>。これに対して、カッサンは古代のオデュッセウスそのひとのうちに、ノスタルジーの二重性を見ていた。ここには両者の論証の進め方の違いを見て取ることができる。

次に、両者の哲学的態度の違いが挙げられる。ジャンケレヴィッチの議論は時間論をベースにしており、形而上学的な位相で展開される。そのため、スタロバンスキーに見られたような精神分析的な読解には距離が置かれる。「ノスタルジーとは、母親的なものである以前に時間的なものである。それは還らぬ時に対する反応である<sup>35</sup>」。これに対して、カッサンの議論は『オデュッセウス』の詩節を丹念に読み込み、そこに登場するモチーフ（根、殻笄、櫂）や表現の細部、隠喩に執着するシンボリックな読解である。「オデュッセウスがついに「我が家」、彼の祖国にいることを示す徴は、実に象徴的なことだが、根を張った寝台である [...]」<sup>36</sup>。ボルズィンガーの医学史的解釈、スタロバンスキーの思想史的・精神分析的解釈が、ジャンケレヴィッチの形而上学的解釈と異なるように、カッサンの修辞学的・文献的解釈もまた、ノスタルジーの一風変わった様相を浮かび上がらせ、それぞれの仕方で複雑にする。

最後に、もしここまでの要約でジャンケレヴィッチの議論が形而上学的で、その意味で血の気

<sup>33</sup> « Ulysse antique, une fois de retour, n'a plus rien à souhaiter. Mais l'Ulysse moderne commence à s'ennuyer dès qu'il est auprès de sa Pénélope, dans cette maison à laquelle son cœur depuis si longtemps aspirait. Amère dérision ! » *Ibid.*, p. 359.

<sup>34</sup> ジャンケレヴィッチが指摘するように、アンドレ・ジッドもまた『放蕩息子の帰宅』において、聖書の物語に想を得つつ、「帰還」に安住できない現代の放蕩息子を描いていた。ディディエ・エリボンのジッド的な書物『ランスへの帰郷』に至るまで、「開かれたノスタルジー」は現代文学におけるひとつの問いになっていると言えるだろう。エリボンについては拙稿「マイノリティ論と階級の問いの連帯契約——ディディエ・エリボンとその友たち（前篇）」（『図書新聞』3508号2021年8月14日、8頁）も参照されたい。

<sup>35</sup> « Et quant à la nostalgie, elle est temporelle avant d'être maternelle. La nostalgie est une réaction contre l'irréversible. » Jankélévitch, *L'irréversible et la nostalgie*, op. cit., p. 299.

<sup>36</sup> « Le signe, ô combien symbolique, qu'Ulysse est enfin “chez lui”, dans sa patrie, c'est son lit enraciné [...] » Cassin, *La nostalgie*, op. cit., p. 20. (邦訳 17頁)

の薄い論調に思えたとしても、それは音楽への絶え間ない言及によって釣り合いをとられていることを補足しておく必要がある。「生成変化を遡ることの不可能、親しんだ国に還ることの不可能、出発点と到達点を合流させることで昔日の生活を繰り返そうと努める私たちの試みの破綻、若返りの挫折、無垢の空想性、これらを前にして人は、奇跡には見切りをつけ歌い始める<sup>37</sup>」。スタロバンスキーにおいて郷愁を誘う音楽がロマン主義の「聴覚的」理論の誕生と密接に結び付いていたように、ノスタルジーと音楽は切っても切り離せない関係にある。ジャンケレヴィッチは、フォーレやドビュッシー、リストなどの楽曲に流れるノスタルジーの音色をきめ細やかに語り、音楽が、生に似て不可逆的性質をもちながら、生と異なり繰り返しが可能であることを強調する。「要するに、交響曲と呼ばれる三十分間は、奇妙にもコントロール可能な不可逆性であり、病と治療薬が同時に与えられる<sup>38</sup>」。言い換えれば、人間の実存が還らぬ時、つまり時間の不可逆性によって絶えず郷愁に苦しめられるとすれば、音楽はその不可逆性と反復可能性を両立させることで郷愁という病とその治療薬を同時に与える（ジャンケレヴィッチの著作における音楽の地位は、この救済の可能性から理解されよう）。これに比べると、カッサンの議論には音楽的な側面が欠落している。彼女にとっての治療薬は「言葉（複数の言葉）」であり、とりわけ書かれた言葉だった。だが、『オデュッセウス』が読まれることより詠まれることを前提にされていたように、それらの言葉が歌われるとき、言葉と音楽はどのように関わるのか。こうした問いもまた、他の著作との比較を通して『ノスタルジー』に差し向けられる問いであろう。

### 結論に代えて 翻訳の礼讃

本稿では、バルバラ・カッサンの『ノスタルジー』から出発して、「ノスタルジー」という語の発明をめぐる歴史、ノスタルジーの医学的側面と思想・文化的側面の交差、「閉じたノスタルジー」と「開かれたノスタルジー」の区別、の三点に注目した。このとき、アンドレ・ボルズィンガー、ジャン・スタロバンスキー、ウラジミール・ジャンケレヴィッチの三者によるノスタルジー論を引き合いに出し、カッサンの議論との比較も試みた。カッサンにとって「一つ以上の言語」が世界の複雑さの認識のために不可欠だったように、「一つ以上のノスタルジー論」は、ノスタルジーの複雑性を認識するため、不可欠とまでは言わないまでも有益なものには違いない。

本稿の筆者にとってやや驚きだったのは、ジャンケレヴィッチの著書だけでなくスタロバンスキーの論文まで翻訳され、日本語読者の便に供されていたことである。ボルズィンガーの学術的研究が未訳なのは致し方ないにせよ、さまざまな論者がノスタルジーという現象にアプローチする仕方を比較することはすでに可能だ。そしてカッサンの『ノスタルジー』が翻訳されたことで、

<sup>37</sup> « Devant l'impossibilité d'un revenir du devenir, devant la déception du retour au pays familier, devant la faillite de nos efforts pour obtenir que la coïncidence du point de départ et du point d'arrivée soit aussi la répétition de notre ancienne vie, devant l'échec de tout rajeunissement et le chimérisme de toute innocence, l'homme, désespérant des miracles, se met à chanter. » Jankélévitch, *L'irréversible et la nostalgie*, op. cit., p. 375.

<sup>38</sup> « En somme la demi-heure nommée symphonie est un irréversible curieusement maniable où le remède nous est donné en même temps que le mal. » *Ibid.*

こうした傾向にはいっそう拍車がかかることだろう。彼女は『翻訳礼讃』のなかで、エリート主義的で時に反動的と見なされる人文学について、それとは異なる信念を呈していた。「私は、今日の人文学は反<sup>リアクション</sup>動ではなく抵<sup>レジスタンス</sup>抗に、仲間内のものでなく万人のものに、武器として役立つものに（ふたたび）なると信じている<sup>39</sup>」。こうした武器としての人文学の場を、絶えず複雑に広げてゆく翻訳という営みを礼讃することで、本稿の締め括りとしたい。

---

<sup>39</sup> « Je crois que les humanités sont aujourd’hui passées de la réaction à la résistance, et qu’elles deviennent ou redeviennent efficaces non pas comme un entre-soi, mais comme un pour-le-monde, comme une arme. » Cassin, *Éloge de la traduction*, *op. cit.*, p. 13.